



サムライガール ～決戦はパリで！

みかづき紅月

illustration ©YUKIRIN

美少女文庫
FRANCE & SHOIN

プロローグ

刹那そっくりの黒騎士

巴里、真夜中のノートルダム聖堂――

奇妙なほどの静けさと深い闇が支配するただっぴろい空間に、一人の騎士が佇んでいた。

万華鏡を彷彿とさせるステンドグラスの薔薇窓から柔らかな月明かりが差しこみ、騎士を照らしだしている。

その足もとで、握りしめる槍を無残にも折られた女性が血溜まりに身体を横たえ、痙攣していた。

「……つく。黒騎士。なぜ、あなたがここに――」

耳障りな呼気を繰り返しながら、彼女、近峰冷羽は鋭い目で騎士を睨みあげた。

「すべては予定通り。それゆえに……」

問いに対する返答。透き通った低い声が、淡々とした抑揚を伴って聖堂に響き渡る。金色の艶やかな髪を一条の乱れなくまとめ、高い位置でポニーテールにした黒い甲冑を身につけた女騎士。その手には、血にまみれたレイピアが握られている。

彼女は、その顔を覆っている白い仮面に手をかけた。

次の瞬間、冷羽は、はっと息を呑み目を疑う。

白い仮面を身につけた騎士の素顔は、彼女がよく知る人物に瓜二つだったのだ。

陶磁器のごとき肌を持つ、目鼻立ちの整った美しい騎士は酷薄に笑う。

その冷ややかなアイスブルーの両目には、たった一片のぬくもりすらない。ただ、ダイヤモンドのように強固な意志が感じられるのみ。

一分の隙すらない完璧な美貌を誇る彼女は、ともすれば名匠の手で作られた自動人形なのではと錯覚させる。感情すら持ち合わせていないようだ。

「お、おまえはいったい……」

「そう、日本に戻り、おまえのよく知る人物に私の存在を告げるがいい。だから、今はその命、永らえさせてやろう」

歌うように言くと、黒騎士は、冷羽の傍に散らばった数本の宝剣を胸に抱きかかえ、踵をかえす。それは、持つ者の心を蝕み、それと引き換えに多大なる力をもたらすという、いわくつきの青龍偃月刀、月夜叉の力を借りて、冷羽が一度は持ち主たちから



奪った宝剣の数々だった。

ブーツのかかとが石の床を規則正しく叩く音が、聖堂の高い天井へと吸いこまれてゆく。

「……すべては予定通り、か」

冷羽は、黒騎士に告げられた事実には愕然としながら低く呟いた。

騎士の攻撃は閃光のごとく、鋭くすさまじく。

月夜叉を放棄したとはいえ、いまだなお、力は衰えていないと自負していた彼女の自信を完膚^{かんぷ}なきまでに砕ききっていた。

「月夜叉と違い、使い慣れていない槍とはいえ……」

細身のスーツに包まれた、そのグラマラスな肢体を血の海に横たえたまま、冷羽は瞳を閉じた。屈辱に唇を噛みしめる。

黒騎士が、その気になりさえすれば命の灯火^{ともしび}はやすやすと消えていただろう。

完敗だった。おそらく、彼女が今までやり合ってきた幾多の銘刀の継承者の力をも軽く凌駕していた。

銘刀の継承者というものは、全員、特殊な気を放っているものだ。

だが、くだんの彼女からは、その特殊な気というものをいっさい感じなかった。

（あいつは、銘刀の継承者の血を引く特別な人間ではない。となれば、あれは、彼女

自身の力……。まさか、継承者の血によらず、どんな宝剣をも操れるというのか!）冷羽は戦慄を覚える。

月夜叉の狂気に呑みこまれる以前の記憶を手繰り寄せる。

雷鳴轟くなか、死神の鎌を彷彿とさせる青龍偃月刀を手渡す黒騎士——

鋭い光が瞬いた途端、腰に提げたレイピアの柄にはめこまれた寶石が不吉に紅く輝いたことを思い起こす。が、先ほど目にしたレイピアにはめこまれていた寶石は、蒼い光を放っていた。

確かに、あのとき、黒騎士の腰に提げられていたレイピアは、先ほど彼女が使用していたものとは明らかに異なっていた。

レイピアの柄、スウェプト・ヒルトの紋様も明らかに異なっていた。

両方、力を持つ宝剣だということは、銘刀ハンターであった冷羽には、肌で感じられる。

しかし、やはり違和感があった。

銘刀と銘刀の継承者というものは、よく似た気、剣気を放つもの——

それなのに、黒騎士の殺気と、腰に提げられたレイピアの剣気は水と油のように、決して混じり合うことのないもののように感じられてならなかった。

にもかかわらず、黒騎士はあのレイピアを操ることができていた。

冷羽は、その意味するところに考えを巡らせる。

「だから、私に呪われた青龍偃月刀、月夜叉を与え、銘刀を集めさせ、それを回収しようとしたのか。だがしかし……」

そこまで言うと、冷羽は切れ長の瞳を閉じた。

その直後、聖堂に鐘がひそやかに響き渡った。暗くて重い不吉な音だった。

「……絶対におかしい。絶対に無理だ。こんな重たいものが空を飛ぶはずなどない。悪夢だ」

ぶつぶつと呟きながら、ポニーテールを左右に揺らし、まるでこの世の終わりだと言わんばかりに沈痛な面持ちをした少女がファーストクラスのシートに身体を沈め、震えている。ちょうどその日、フランス行きAF279便のファーストクラスは、ファーストクラスには不釣り合いな若い少年少女で貸しきられていた。

特記すべきは、少女たちが、皆、腰に刀を提げていること。普通ならば、刃物の類は機内に持ちこめない。にもかかわらず、である。

彼女たちが、ごく普通の旅行者じゃないことが見てとれる。機内でも特別に帯刀を許可される特別な存在——

「せ、刹那。大丈夫だってば。そんなに怯えなくても」

「殿。そうは言ってもだな。どう考えてもおかしいであろう」

「いやいや、まあ、誰もが最初はそう思うかもしれないけど、大丈夫だから」

「殿がそう言うのであれば、確かにその通りなのだろうが。そうであつてもだな。う、うう……」

利那と呼ばれた少女は、青ざめながら隣りの少年にしがみついた。

すつと通つた鼻筋の横に、黒と蒼の色いろ違ちがえの大きな瞳がきらめいており、その上に形のよい眉がアーチを描いている。

形よい顎を持つほっそりとした顔立ちの彼女は、艶やかな光沢を放つ黒髪をポニーテールに束ね、セーラー服を身にまといている。

豊かに張つた胸のせいで、セーラー服の丈が短くなつており、タイのあたりの布地に平行な線が走り、少し動いただけで引き締まつたウエストが、ときおり顔をのぞかせる。

彼女は、現代のサムライ、銘刀、蒼月そうげつの継承者であり、世の不正を正すために日夜、自主的に戦いつづけている少女である。彼女のオッドアイはその証だ。

世の不正とはいえ、もっぱら、彼女の祖父が理事長を務める高森学園の風紀を正すことがその主だった活動の大半であり、不意に出くわした血氣盛んな若者の非倫理的行動を正したりもする。